



会報 2020 年 3 月号

日本ニュージーランド協会（関西）

創立 1970 年

New Zealand Society of Japan, Kansai

Pipa's Song

The year's at the spring, And day's at the morn ; Morning's at seven;
The hill -side's dew-pearled; The lark's on the wing; The snail's on the thorn;
God's in his heaven- All right with the world!

(R.Browning)

東京オリンピック・パラリンピック等が新型コロナウイルスの影響で残念ながら延期となりました。今後、社会的な混乱が更に拡大し当協会の活動にも影響が出てまいります。今年は、協会創立 50 周年と役員改選年でもあります。皆様には、改めて更なるご指導・ご協力をお願い申し上げますとともにご健勝をお祈りいたします。

第 279 回例会（会員総会）

と き：5 月 16 日（土） 10 時 30 分～12 時 00 分

ところ：中央電気倶楽部 北区堂島浜 2-1-25

第 280 回例会（ラム肉調理・試食会）

と き：予定 10 月の土曜日 10 時 30 分～14 時 00 分

ところ：こうべ市民福祉交流センター 中央区磯上 3-1-32



Tukituki River（松沼清司会員）

事務局：〒550-0002

大阪市西区江戸堀 1-23-26 西八千代ビル 3 階 C

電話・FAX：(06) 6607-2112

<http://nzsocietykansai.com> E-mail: nzsjk@yahoo.co.jp

行 事 ご 案 内

第279回例会（会員総会）

と き：5月16日（土）

10時30分～12時00分

ところ：中央電気倶楽部

北区堂島浜2-1-25

06-6345-6877

議件1. 2019年度事業・決算報告

2. 2020年度事業計画（50周年行事含む）・予算

3. 役員改選

* 昼食懇親会：今年はいきませんのでご了承ください。

出・欠：5月2日（土）までに同封ハガキにてご通知ください。時節柄無理なご出席は不要です。委任状をご利用いただければ幸いです。

第280回例会（ラム肉調理・試食会）

と き：10月の土曜日10時30分～14時

ところ：こうべ市民福祉交流センター

中央区磯上通り3-1-32

078-271-5310

美味しく健康にもよいNZ産ラム肉を楽しみましょう。

定員：35名 締切：未定

参加費：2500円

協賛：アンズコ・フーズ（株）

申し込み：nzskj@yahoo.co.jp

090-1955-2566（松元）

* 本年の例会は新型コロナウイルスの影響で開催日などの変更が予想されますのでご了承ください。

■ ラグビーワールドカップ2019 オールブラックス

ラグビーワールドカップは、オリンピック、サッカーワールドカップと並ぶスポーツイベントです。第9回大会は、日本で開催され、国内12会場で行われました。関西地域では、花園ラグビー場（東大阪市）とノエビアスタジアム（神戸市）が会場になりました。ラグビーは通常、試合後1週間のインターバルを設けて次の試合をします。このため、ラグビーW杯の期間は1か月半と長くなります。予選リーグは5チームずつ4組に分かれて総当たりで上位2チームが決勝トーナメント（準々決勝・準決勝・決勝）に進みます。そのため予選リーグで1か月要し、外国からのファン（サポーター）は1か月滞在することになります。更に、決勝まで進めば2週間必要になります。

予選リーグA組で日本代表チームは、4戦全勝となり、3勝1敗のアイルランドと共に準々決勝に進みました。ニュージーランド（NZ）は、B組で1位通過し、この大会で優勝する南アフリカ（2位通過）と共に準々決勝に進みました。

日本は皆さんご存知の通り、準々決勝で南アフリカに敗れました。NZはアイルランドに勝ち、次の準決勝でイングランドと対戦しました。イングランドのHC（ヘッドコーチ＝【監督】）は前大会（イングランド大会）で日本を率いたエディー・ジョーンズです。彼は知将で、あらゆる方法で勝利を手繰り寄せる人物です。（彼の著書を2冊読んだことがあります、本当に負けず嫌いな性格です。）4年前に日本代表チームのHCを退いた後、当時は低迷していたイングランド代表チームHCに就任し、チームを数年で復活させました。



（E・ジョーンズ氏）



(NZ対 南アフリカ)

準決勝のNZ対イングランドの結果は、NZファン・NZ関係者には残念な結果になりました。7-19 (前半0-10、後半7-9) でNZは、予想に反して敗れました。イングランドの防御が良くてプレッシャーが強くNZチーム本来のプレイが封じられました。雨天の影響もあり、ボールを何度か落としてしまいました。会場に詰め掛けたファンの落胆は大きいものでした。「Never We Doubt」(勝利することを決して疑わない) と書いた旗を持ったファンも複数見られました。オールブラックス仕様の黒いシャツに身を包んだ大勢のNZファンが声援を送りました。準決勝で敗れたNZですが、次の週の3位決定戦で本来の力を取り戻しました。もう一つの準決勝で南アフリカに16-19で惜しくも3位決定戦に回ったウェールズに、NZは40-17 (前半28-10、後半12-7) で完勝したのです。【この試合は、上皇さま・上皇后さまがご観覧されました。】

9月21日、B組予選リーグで、いきなりNZは南アフリカと対戦しました。ラグビー関係者にはこれ以上のゲーム(試合)はありません。実力では世界の2強なのです。ラグビー強国の長年のライバルの対戦です。NZはオールブラックス、南アフリカはスプリングボックス(地面を高く跳ねて走るシカに似た動物)の愛称を持ちます。正にゴールデン・ゲームです。NZは27-13 (前半17-3、後半10-10) で南アフリカに勝利しました。当時の世界ランキング(これは実力を正確に反映できるものではなく、相性があり、対戦相手によっては反対の結果が出ます。)は、NZが2位、南アフリカは4位でした。(大会後は、南アフリカが1位になりました。)この両チームの

対戦は五分五分の成績です。2018年は1勝1敗で、2019年(W杯前)の対戦は、16-16の引き分けでした。この両チームが予選リーグで対戦しました。NZはW杯を過去3度、南アフリカは2度(第1回、第2回は国の事情で不参加)手中にしている強豪国です。予選リーグのこの試合内容が両チームの力をそのまま反映しているとは言えません。それは、決勝まで見通した戦い方を両チームが考えての一戦だったからです。ここでNZチームのW杯での結果を書いておきます。第1回(87年)優勝、第2回(91年)3位、第3回(95年)2位、第4回(99年)4位、第5回(03年)3位、第6回(07年)ベスト8、第7回(11年)優勝、第8回(15年)優勝です。

このNZ代表チームを率いたスティーブ・ハンセンHC(ヘッドコーチ)は、この大会後に退任することを表明して臨んでいました。3位決定戦の試合後のラグビー会場でのインタビューは、感動的なものでした。NZのTVキャスターからの質問は次の通りです。「あなたはW杯にHCとして代表チームを2度率いた。史上最高のHCの一人だと言われていますが、どのような経験でしたか。」しばらく答えられませんでした。少し涙ぐんで声が出ませんでした。会場を埋めたファンからの大声援(NZから来日している、オールブラックス仕様のシャツを着た大勢の人々からの拍手と声援が会場に響きました。)に、スタンドの方を見て片手を挙げて応えるのが精一杯でした。「名誉の一言だ。」この渾身の答えに全てがあります。「サンキューベリーマッチ」(キャスター)「サンクス」(ハンセンHC)。インタビューはそれだけです。そして、選手たちが待つ表彰式に向かいました。様々な感情が込み上げてきたのでしょう。

私は、NZのラグビーが世界一だと思っています。強さはもちろんですが、他にも理由があります。伝統的に北半球の英国(イングランド・スコットランド・アイルランド【アイルランド共和国は英国ではないですが。】・ウェールズ)やジョージア(グルジア)、南半球の南アフリカはフォワードを中心とした戦術が得意です。力で押すタイプです。フランスやイタリアのラテン系の国や南太平洋の

島国（サモア・トンガ・フィジー）、オーストラリア、南米のアルゼンチン、ウルグアイは、バックスでボールを繋いで得点し、勝負する傾向があります。これは、国民の性格、志向性が強く関係しているように思います。

NZは、この2つの特徴をどちらも高いレベルで持ち併せています。フォワードの強さ、バックスの展開力。それに何より、プレイ（プレー）の創造性の豊かさです。ラグビーを少し知っている人なら、この意味は理解できます。これこそがNZラグビーだと思うのです。1905年に英国遠征をした時に、とても強く、戦術が当時のもの（フォワード：FWとバックス：BKとの役割が分かれていた）とは違い、FWが、前に進んで相手に当たるだけではなくて、BKのようにボールをパスし続けるので、当時の通信社の特派員が電報で、“All Blacks”（全員がバックスのようなプレーをするチームだ）と伝えるつもりが、“All Blacks”と間違えてしまい、現在のオールブラックスの名称になったようです。この時のチームのジャージは水色だったと思います。当時からのラグビースタイルの伝統が今も受け継がれています。

また、試合前に行われるウォークライ（ハカ）は恒例になっています。マオリの血を引く選手の中から指揮する人が選ばれ、チーム全員の闘志を鼓舞します。今大会のハカのリーダーは、T・J・ペレナラ（背番号21番）でした。ジャージからはみ出した肌には、マオリ伝統の入れ墨（タトゥー）が見えます。他のチームにもタトゥーを入れた選手がたくさんいましたが、NZやサモア、トンガ等のポリネシアの選手に特に多く見られます。国家を斉唱した後、ピッチ（グラウンド）に選手が広がり、ペレナラが何やら叫び始めます。目を大きく開き、舌を思い切り出し、手足・全身を動かし、気持ちを高ぶらせます。これまで長い間、「カマテ」が通常でしたが、今大会では、「カパ オ パンゴ」（黒を纏った集団）が多く披露されました。3位決定戦は、主将（キャプテン）のキーラン・リード選手がリーダーになり、「カマテ」をしました。

「カマテ」の歌詞の意味は、大体次の通りです。

『私は死ぬ。死ぬ。私は生きる。生きる。見よ、この勇気ある者を。この洞穴に留まるのではなく、一步上に。一步上に梯子を登る。太陽の光の中へ立ち上がれ。』このような内容です。W杯前のテレビの特集でNZのラグビー代表（ペレナラ選手だと思います。）が、ハカをする意味をインタビューで話していました。自分たちのチームだけでなく、対戦する相手チームに敬意を表す意味もあるそうです。



（バレット3兄弟）

NZチームのスタンドオフ（背番号10番）は、ボーデン・バレットです。ラグビー界の年間最優秀選手にも選ばれたことがあるスター選手です。彼には2人の弟がいて、その2人もオールブラックスのメンバーです。（今大会、ある試合で3兄弟が全員トライを決め、話題になりました。）

アイルランドチームは、2つの国・地域の合同チームです。アイルランド共和国と英国の北アイルランドが1つの代表チームを作っています。かつて英国に統治されたアイルランドが独立し、カトリック教徒の国のアイルランド共和国を作ろうとしましたが、プロテスタント教徒が多く住む北東地域が、英国領に残ることを主張し北アイルランド地域ができました。【1922年】（また、北アイルランド紛争【1969～1998年】として、地域内で長く争いました。現在は、収束しています。）1922年に分離する前からアイルランドラグビー協会（1879年創設）として代表チームを持っていたので、国・地域が分離した後も1つのチームを組んでいます。試合前の旗も2つ掲げられます。国歌は使用せず、チーム歌を歌います。“アイルランドコール”です。「肩と肩を寄せ合う。アイルランドの叫びをうたう。…」という内容です。2つの国・地域の選手が互いに肩を組み歌い、観客が合唱し

ます。

日本でも話題になりましたが、ラグビー競技では、他の国の人々が代表に入ることができます。その国の代表ということではなくて、その国のラグビー協会の代表、または、ラグビー仲間の代表という考え方です。親の出身国であることや、3年以上住み、国内のチームに所属している等があれば可能です。今後は5年以上になる予定です。しかし、今のルールでは、一度ある国の代表になれば、その後、他の国の代表にはなれません。(ラグビー日本代表になった外国籍の選手は、祖国の代表にはなれません。祖国の代表になる思いを断ち切って出場したのです。)日本と対戦したスコットランドチームの中にもNZ出身の選手がいました。(8番の選手だったと思います。)他のチームにも多くのNZ出身の選手がいたと思います。逆に、NZチームにも、他の国出身のメンバーが入っていたと思います。

アイルランド代表チームのHC(監督)ジョー・シュミットは、NZ人です。彼もこの大会後、チームを退きます。準々決勝で祖国NZに敗れましたが、試合後、スタンドから降りて来る時に、多くのアイルランドサポーターから、肩を軽くたたかれながら労いの言葉を掛けられていました。

2018年のシックスネ이션ズ(イングランド・スコットランド・アイルランド・ウェールズ・フランス・イタリアのラグビー対抗戦)で優勝。その11月には、NZオールブラックスにも勝ち、2019年の9月に、ウェールズにも勝利し、世界ランキング1位に押し上げた名将でした。

3位決定戦でNZに敗れ、4位になったウェールズもラグビー強国です。世界ランキング1位になったこともあります。ただ、SO(スタンドオフ)の司令塔、アンスコム選手が負傷のため、直前に代表を外れたことが痛手となりました。ウェールズのサポーターも熱血的です。“レッドドラゴン”と呼ばれ、イングランドへの対抗心が強いのです。

(この傾向は、スコットランド、アイルランドも共通です。)赤色のジャージを身に付けます。(イングランドのジャージ【ファースト・ジャージ】は、白で、赤いバラの刺繍が左胸にあります。)今

回は、準決勝で南アフリカに終了間際のキックで得点され、惜敗(16対19)し、3位決定戦では、NZに敗れ、4位になりました。かつて、1970年代に黄金時代を築きました。SOバリー・ジョン、SHガレス・エドワーズ、SOフィル・ベネット、FBJPR・ウィリアムスを擁するチームは伝説となっています。私が学生時代、ベースボールマガジン社が出版していた、自伝『真紅のジャージ ウェールズの名SOバリー・ジョン物語』と『ガレス・エドワーズ自伝 ウェールズの名SH』を読んだことがあります。

《追記》 NZオールブラックスのメンバーから5人が、今後、日本のラグビー・トップリーグでプレーします。No. 8(ナンバーエイト)キャプテンのキーラン・リードはトヨタ自動車で。ロック(背番号4番)ブロディー・レタリックは、神戸製鋼でプレーします。

(貴志康弘)

~~~~~

## ■ ニュージーランド便り

これから数回にわたり客員会員の酒井さんから生活者の立場からの現地事情を報告していただきます。

### <第1話>

ニュージーランドとの出会いは25年前になる。阪神大震災の前年。当時オランダに住んでいたわたしの電話が鳴った。「突然だけれど、ニュージーランドに行かない？」神戸の母からだった。

「え、そんなところに何があるの？」がわたしの第一声だった。

羊のたくさんいる国、以外に予備知識はゼロ。しかも北半球の端から南の端への移動、である。オセアニアには行ったことがなく、遠そうだなあ、と思ったのをぼんやり覚えている。

南島をゆっくり観光したいという母の希望を受け、国際電話をかけ宿の予約をした。今と大きく事情が異なり、Eメールをするには長い数式のよ

うなものを打ちこんでいた時代だった。もちろんオンラインでの宿泊予約システムもなかった。面倒な手続きを踏んだのち、シンガポールで両親と祖母の3人と落ち合い、やっとニュージーランドの土を踏んだ。まさか将来、その地がわたしの第二の故郷になるとは夢にも思わずに。

CHRISTCHURCH に長期滞在、というだけのざっくりとしたプランだった。ゴルフがしたい、と父。きれいな庭園が見たい、と母。Motel（車で移動する旅行者のために、自室の目の前にマイカーが停められる）という形態の宿に泊まった。車を持っていないのにモーターに泊まった理由は記憶にないが、快適、清潔、機能的と三拍子が揃っていた。

だが最初の失敗は、お湯が足りなくなったことだった。一部屋ごとにドラム缶のような湯沸かし器（Hot water cylinder）が備えられているが、入っている湯が無くなったら終わり。これを知らずにいると、シャワーは途中で水になる。私たちの場合も、最初の一人（筆者）が見事にタンクをすっからかんにした。長シャワーを浴びているという自覚もなく、突然蛇口から水が出た時は慌てた。その上、この「不具合」をフロントに訴えたら、「明日までもうお湯は出ません」。ガスによる瞬間湯沸かし器に慣れた身には衝撃的だった。

今、わが家を訪れたゲストに最初に見せるのが、このシリンダーだ。熱源は電気だから、湯を沸かすのに時間がかかることこの上なし。ドラム缶サイズ1本で全員のシャワー、食洗機と洗濯機用の湯をまかなうので、どうかよろしく、とひと言も添える。

皆さんにも、もしモーターに泊まったら、まず片っ端から部屋の戸棚（cupboard カボード、と聞こえる）を開けてタンクを探し、その大きさを確かめることをお勧めしたい。

水といえば、わが家の飲み水は山からの湧水だ。町から車で15分の距離なのに、塩素やフッ素などの入っていないホンモノの水が飲める。もちろん無料だ。

山の上に泉があり、コンコンと湧き出る水を近所の人と共有パイプで分け合っている。しかしこれが、庭に水をまく程度の細いホースなので、木

の葉や枝などの不純物を時々手で取り除かないと、詰まってしまう。また、生活用水は敷地内の小高い位置に大きなタンクを置き、雨水をためている。このタンクはとてつもなく大きい。Life Style Block（職業的農場ではなく、そのライフスタイルを楽しみたい人たちが住む「田舎風」エリア）には、巨大な丸い硬質プラスチックタンクが点在している。色は黒だったり緑だったり。灰色のコンクリート製もあって、オーナーが腕を振るって「壁画」を描いたものまで見かける。うちには素材の違うタンクが3つあり、合計約6万リットルが溜められる。

「雨水使用」ということは、すべてはお天気次第。日照りが続けばタンクはあれよあれよ、という間に空っぽになる。牧場の草が黄色がかった茶色に乾いてくると、郊外の道路に水を満載したWater Tanker が、チャポンチャポンと水を滴らせながら行き来するのを見かけるようになる。この水は有料で、各家庭で必要に応じて配達を頼み、家のタンクを補充する。

こんなわけで、天気と水の使用量には誰もが敏感だ。同じホースの水を分け合うので、自分よりも低い土地に住む人が先にホースを全開すると、突然水圧が下がり、水が出なくなることもある。街なかに住んでいれば、水道の蛇口をひねると水はいつでも出るのでこういう「ドラマ」を経験することもない。でも、街を離れると、コミュニティで連携しながら暮らす姿勢は不可欠だ。



ファームに到着した給水車。北島の北部では1ヶ月以上日照りが続き、大地は茶色に。右端の薄緑の円柱が給水タンク。

また、田舎には Long Drop、という汲み取り式トイレもまだ残っている。海に見える丘に立つ友人の家がこのタイプだった。しかもドアがない。「せっかくの景色が見えるように」と友人。母屋から離れているので、夜は懐中電灯持ってトイレに行く。穴がいっぱいになると、蓋をして次の穴を掘るだけ。徹底的にエコなのは、芝刈りで出た新鮮な草をためておいて、トイレ使用後はその都度上からパラパラと撒く。消臭にも良いそうだ。

わが家ではさすがに汲み取りは勘弁、と敷地内の下水処理用にミミズを飼うことにした。ミミズといっても、庭で見かけるようなひ弱いものではなく、その名も Tiger Worm (虎ミミズ) という、南島のオタゴからのお取り寄せ品。森林の自然なサイクルを取り入れた、ナチュラルで安全な下水処理方法だ。サナダムシをお腹に飼っていたことで知られる医学博士、藤田紘一郎さん(寄生虫学)の著書にも似たようなシステムが紹介されていた記憶がある。

日本にもおがくずなどを使う処理法があるが、攪拌する手間と、電気を使うため費用がかかる。「ミミズシステム」は、土地に高低差があれば攪拌はもちろん、モーターも要らない。開発したのは地元の小さな企業だ。最終的に滋養豊かな、果樹園用の「水」になる。

もちろん制約もある。市販の塩素入りトイレ掃除洗剤は使えないし、台所からの排水も、ミミズの生育環境(中性から弱アルカリ性)を保つために注意と工夫が必要だ。酸性に傾いたときには、ミミズの「棲み家」にちぎった食パンを入れて pH を調整する、という応急処置を施す。メーカーも半年ごとに、ミミズの健康状態チェックにやってくる。「ミミズ再生水を使うと柑橘類がよく育つよ」とスタッフ。今年こそはわが家にも果樹園を作りたいと思い、レモンにしようか？ グレープフルーツがいいかな？ と楽しみながら苗木のショッピングリストを作成中だ。

毎日の暮らしに欠かせない水。水源からわが家まで、どこをどう流れて来るのか、家族でどのくらい消費するのか、「排水」をどう完結させるのか。日々、気を配り、目と手の届く暮らしが気に入っ

ている。

(さかい ケイツミカ・WHANGAREI 在住)

\*ファンガレイ：オークランドから北へ約 160 km、クルマで2時間少しの亜熱帯の町、人口約 5.2 万人、美しい港がある。City of 100 Beaches と呼ばれる。

## ■ 客 員 会 員 の ご 紹 介 Craig & Keiko Rome ご夫妻

2年前に私(中村)が依頼し、客員会員に入会していただきましたロームご夫妻についてご紹介します。ロームご夫妻と知り合いましたのは、私が奈良の自宅近くの「青山テニス同好会」という会に入会しており、メンバーに小橋さんという方がおられ、その娘さん桂子さんの夫が英国のご出身でNZに住んでおられることを知りました。ご夫妻が帰国された際には一緒にプレーも楽しみました。お二人共スポーツ万能で、私は負かされました。ご夫妻はクライストチャーチで、旅行会社を経営されています。皆さんがNZをご家族や小人数で旅行されるなら適格なアドバイスがいただけますし、ホームステイもできます。アオラキツアー・カイクウラのクジラ観察・ワイナリーの見学等、皆さんのご要望に日本語できめ細かく対応していただけます。詳しくは Cannz tours のウェブサイトをご覧ください。

クレイグさんは、スコットランド生まれ、エジンバラの高校を卒業後、浪人してヒッチハイクで世界中を歩かれました。その時NZが気に入ったそうです。その後、スコットランドに戻り農業大学を卒業後の1977年にNZに永住し農業の仕事・カフェの経営もされました。次に家族を連れて前橋の共愛学園で英語教師をされました。その後第2の母国NZへ戻り大手旅行会社のガイドを経て独立されました。

桂子さんは、2010年12月にNZに留学され、2か月後にクライストチャーチの地震にも遭遇されています。現在クレイグさんと仕事を共にし活



躍され、また私立病院のシェフもされています。  
2人のお子さんは既に帰国されていますが、そのうち次男さんは剣道の世界選手権のNZ代表の腕前です。客員会員のアレキサンダー・ベネットさんが監督で、弟のブレイクさんがコーチだそうです。来年、パリの世界選手権に出場されます。  
お二人とも英語と日本語がご堪能（当然ですが）です。来阪されたら臨時例会でお話を伺いたいと思います。

（中村重夫）

連絡先：CanNZ Tours      info@cannztours.com



（Rome ご夫妻）

~~~~~

■ Do you know them ? NZで活躍する日本人

北島のネルソン在住の宇田幸康・弓子ご夫妻をご紹介します。ネルソンからは4年前に祝祭合唱団が来日され当会でも天満教会で例会を開催しました。南島の西北、タスマン湾に面した人口6万人の町は温暖な気候で英国からリタイアされた人々も多く住まわれています。幸康さんは、浅草生まれで日本・メキシコ政府交換留学第1回生。早稲田大学アンデス縦断登山隊に参加、コロンビアのドスエルマナス山世界初登頂、ボリビアでは時計輸入会社経営、世界自動車連盟公認のシルクロードラリーの事務局長、世界各地を4駆車で駆け回るキャメルトリフィーの日本事務局のコーディネーター、鈴鹿F-1レースにも参画するなどアウトドア・アドベンチャー界で活躍していたことも

ある変わり種。弓子さんは日大芸術学部在学中に戦後の日本を代表する報道写真家、三木淳氏に師事した写真家でした。ニュージーランドに来られたきっかけは、子供たちを自然な環境の中でのびのびと育てたかったからだそうです。

自然環境を守り自給自足的なライフスタイルのもと養蜂家として20年ほど暮らしておられます。「アピビー」ブランドの創業者でマヌカハニーを生産し日本で販売されておられます。会員の皆さんはマヌカハニーの効用はよく御存じですが、宇田さんによればグレイドのMGO・UMFなどの数値は自然に変化したり、人為的に変えることができること、またマヌカの含有量が少なくても数値が高いマヌカとして販売されている蜂蜜があることから数値の表示をしていません。非加熱処理の酵素をたっぷり含む純度の高いマヌカにこだわっているそうです。蜂蜜はブドウ糖と果糖の主成分に色々なビタミン。ミネラル、酵素からできているので1日に大匙1から2杯をヨーグルトやシリアルにかけたりして食べることで健康の維持増進に役立ちます。宇田さんはミツバチの毒（ビーベノム）を使った蜂針治療をするために蜂を飼いはじめたのがこの世界に入ったきっかけだったそうです。ApBeeはAlternative Practice Beeを略したもので「みつばち代替治療」という意味を込めているそうです。ApBeeの商品は、オークランド空港や日本ではアピビーセレクト ApBee-Select-<https://shop.apbee.com/>で購入できます。



（宇田ご夫妻）

■ 第277回例会報告（柿狩り）

11月16日、素晴らしい秋晴れの下、日本ニュージーランド協会（関西）の年間三大イベントの一つである柿狩りが奈良県西吉野の太津さんの柿農園で実施されました。ご参加予定だった方々の中で、長女さんに初孫がお生まれになる予定日と重なったとか、仕事上の説明会を実施しなければならない等、やむを得ず不参加になるという方が多く20名の参加となりました。しかし元気な小学生や初参加になる方々もあり例年より少ないという印象は無くにぎやかな例会となりました。

昨年は台風の為に大きなダメージを受けたビニールハウスがあり心を痛めました、今年はそれが真新しいハウスとなって迎えてくれました。太津さんには大きな痛手で有ったそうですが、私どもを心から温かく迎えて下さいました。

お目当ての柿は少し完熟が遅れているとのことでしたが素晴らしい柿、柿、柿がたわわに実っている中で太津さんの「よく熟れているのを自由にとってよ！」という大きな声に押されて各自が心置きなく選ばせて頂いた至福の時でした。その場ではそれなりに大きい柿と思っていましたが自宅で並べると改めてその大きさに驚きました。因みに一番大きな柿を計ってみましたら何と400g近くあるではありませんか！ そのような他に無い素晴らしい柿を自由に選ばせて下さる太津さんに改めて感謝する次第です。

柿狩りの後、太津さんのご自宅の見晴らしの良い部屋で各自持参の昼食となりました。そこから見る景色は緑と赤が織りなす秋の盛りの絵葉書模様で皆見とれていました。

尚、今回会員の車に乗り切れずに、一部の方がタクシーを使用せざるを得なくなり多大の出費をされました。次回は全員が同じ条件になるように一考を要します。

（松元昇）

参加者：松沼清司・伊藤美登利・富永みちよ・三浦治郎・鈴木博昭・鈴木敏裕・藤野紀子・林進・山内龍男
林園子・林弘子・山野敏子・牟田いつ子・山下誠二



（太津さんの農園）

■ 第278回例会報告（クリスマス）

恒例のクリスマス例会は、神戸倶楽部で12月11日にゲストを含め35名の参加をいただき開催しました。松元副会長の司会のもと石井会長の挨拶から始まりました。最初に神戸マリンバソサエティ（宮本慶子氏主宰 創立1962年・マリンバの魅力伝えるための定期公演・出張公演・教室運営）の山本葉菜子さん・小松加奈さんのお二人に演奏していただきました。皆さん軽やかなマリンバの音色を楽しめました。ユーチューブで彼女たちの演奏を楽しむことができますのでご覧ください。美味しい食事の後は、クイズ・ビンゴゲームで盛り上がりしました。

2019年は川瀬初代会長がご逝去され20年となりましたので、参加者からの近況報告時に川瀬氏の想い出を藤村さん（川瀬氏長女）をはじめ生前をご存知の方から語っていただきました。日本とニュージーランドの草の根交流の礎を築かれたこと、クライストチャーチで開催されたジャパンフェスティバルの概況、現地でご逝去された時の様子等を伺いました。また、1995年（創立25周年）に発行された「Dr. Kawase が語る新地樂土（ニュージーランド）あれやこれや」・1999年発行の「New Zealand Society of Japan の誕生」を会場で展示しました。プレゼント交換・バザーも盛況でした。きよしこの夜・ポカレカレアナの合

唱後、柳田名誉会長の閉会挨拶で例会は終了しました。

(石井久行)

参加者：貝原由美・平戸ヨウ子・津村政美・吉田多津子
木嶋征久子・難波やす子・森川和子・松元美智子
山野敏子・迫キミ子・西原博子・牟田イツ子・興津芳子
加藤賀子・宮下嘉子・柳田勘次・藤村瑋子・正木紀通
松元昇・谷川紗季・中村重夫・石井久行・林進・塙幸子
アンセスヘスス・牧初代・竹内遙香・山下明・三浦治郎
林園子・林弘子・山本葉菜子・小松加奈・山下美智子
山下誠二



(クリスマス例会)

~~~~~

## ■ オーストラリア・デーに参加して

ニュージーランドの隣国として歴史的・社会的に緊密な関係をもつオーストラリアを知る良い機会として関西日豪協会主催の「オーストラリア・デー」祝賀会(1月29日・リーガロイヤルホテル)に臨時例会として合流しました。当協会会員と友

人(クリスマス例会のマリンバ奏者のお二人を含め)16名が参加しました。会場には約70名が参加されオーストラリアの建国を祝いました。本国では各地でパレード・花火大会・コンサート・ビーチパーティ等多彩な行事が行われます。一方、近年オーストラリアでは最初の移民船がシドニー湾に上陸した日、1788年1月26日を建国記念日(オーストラリア・デー)として祝うことを批判する声もあります。しかし、多民族国家としての融合を確認する日として意義ある記念日として強く支持する人々が大半です。祝賀会は国歌「Advance Australia Fair」合唱から始まりその後、テレマン・アンサンブルのコンサートを楽しみました。

次に会場を移して懇親会が行われました。瀬戸口会長の日豪関係についてのご挨拶・来賓のディビッド・ローソン総領事(高校時代に茨城県で過ごされた)の流暢な日本語でのご挨拶・関西担当の山本条太大使の乾杯の音頭がありました。皆さんはスピーチの中で昨年秋からの大火災に言及されました。受付には、義援金箱が置かれていました。総領事は、自衛隊の緊急派遣に対し謝意述べられましたが、個人的には日本からもっと多くの人の派遣があっても良いのではないかと思います。美味しいオーストラリアの料理とワインを楽しみながら会員は、初対面の方々にニュージーランドの魅力をアピールされていました。残念ながら現在大阪にはニュージーランドの領事館がなく羨ましく思いました。将来、ニュージーランドと関西の交流が活発になり再び領事館が設置されることを期待します。

(石井久行)

参加者：堀江敏樹・堀江悦子・藤野紀子・水谷訓子  
閑田弘子・林進・アンセルヘスス・山下明・山下誠二  
中村重夫・井上佳久・山本葉菜子・小松加奈・分領国治  
平瀬拓也・宮崎恵子・石井久行

## ■ お 願 い

会報への寄稿、運営・行事へのご提案などをお待ちしています。